

# スウェーデンボルグの「照応」の教義の エマソン、鈴木大拙への影響

高梨 良夫

## 1 はじめに

これまで論者はR. W. エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) の超越主義思想 (Transcendentalism) と鈴木大拙 (1870-66) の大乘仏教、特に禅思想との比較的考察を試み、両者の思想の類似点と相違点を指摘してきた。<sup>1</sup> またエマソンの思想をキリスト教神秘主義思想の流れのなかに位置付ける試みの一環として、ドイツのキリスト教神秘主義の思想家ヤコブ・ベーメ (Jacob Böhme, 1575-1624) のエマソンに対する影響に関する考察も試みてきた。<sup>2</sup> 本稿においては、エマソンと鈴木は共に思想形成の過程において、スウェーデンのキリスト教神秘主義思想家スウェーデンボルグ (Emanuel Swedenborg, 1688-1772)<sup>3</sup> の教義の影響を多分に受けているという事実に着目することにより、エマ

1 拙稿「エマソンと鈴木大拙—「エマソンの禅学論」に関する比較的考察—」『長野県短期大学紀要』第69号 (2014年)、79-90頁、「エマソンと鈴木大拙—『東洋的な見方』を中心とする比較的考察—」『長野県短期大学紀要』第70号 (2015年)、81-91頁、「Ralph Waldo Emerson and Daisetsu Suzuki: A Comparative Investigation on their Views of Nature, Mind, and Language,」*Thoreau in the 21<sup>st</sup> Century: Perspectives from Japan*, ed. Masaki Horiuchi (The Thoreau Society of Japan: Kinseido, 2017), pp. 246-60、「アメリカ超越主義と鈴木大拙—エマソンからソローへ—」『グローバルマネジメント』第2号 (2020年)、9-23頁。

2 拙稿「エマソンとヤコブ・ベーメ—思想の類似性をめぐって—」『長野県短期大学紀要』第73号 (2018年)、33-43頁、「エマソンとヤコブ・ベーメ—コールリッジを媒介として—」『グローバルマネジメント』第3号 (2020年)、64-80頁。

3 スウェーデンボルグはスウェーデンの自然科学者・哲学者・宗教家。自然科学を学んだが、その応用についての工学に関心を抱き、鉱山局に勤めながら自然科学者として業績を残した。自然の根本を探求するなかで、科学の経験的認識の限界を超えた様々なビジョンを見始め、聖書の霊的な意味を霊の世界との交流の体験に基づいて明らかにするという使命を自覚し、後半生を宗教家として送った。霊や天使の体験に基づき天国と地獄、死後の世界について語り、啓蒙主義のヨーロッパに衝撃を与えた。また信奉者達によって「新エルサレム教会」が設立された。(『世界宗教大事典』、平凡社、1991年等を参照) スウェーデンボルグの思想については、高橋和夫『スウェーデンボルグの「天界と地獄」—神秘思想家の霊界世界を解き明かす—』(PHP、2008年)、『スウェーデンボルグの思想—科学から神秘世界へ—』(講談社現代新書、1995年) 参照。またスウェーデンボルグのエマソンに対する影響については注12、スウェーデンボルグの鈴木大拙に対する影響については注19を参照。本稿の独自性は、スウェーデンボルグのエマソンと鈴木に対する影響に関する比較的考察を試みることにあり、論者の知る限り先行研究はない。

ソンと鈴木思想に関する比較的考察、さらにエマソンの思想をキリスト教神秘主義思想の流れのなかに位置付けようとする試みを続行する。

## 2 エマソンとスウェーデンボルグ

エマソンがスウェーデンボルグの「照応」の教義を学ぶ直接の契機となったのは、超越主義思想を本格的に展開し始めるよりもかなり以前の、ハーヴァード大学神学部大学院 (Divinity School) 在学中のことであった。1826年9月13日の兄ウィリアム (William Emerson, 1801-68) 宛の手紙には、スウェーデンボルグ主義者の薬剤師 Sampson Reed (1800-80) の『精神の成長に関する考察』 (*Observations on the Growth of the Mind*, 1826) というパンフレットを読んで強い感銘を覚えたという記述が見い出される。<sup>4</sup> ボストンには1818年8月にスウェーデンボルグ教会 (The New Church) が設立され、1827年9月からは『ニュー・エルサレム・マガジン』 (*The New Jerusalem Magazine*) を発行し、スウェーデンボルグの思想の普及に努め、当時のニューイングランドの超越主義者達にも多大な影響を及ぼしていた。エマソンは1828年にはスウェーデンボルグの著作の英訳版『靈魂と身体の交流』 (*Intercourse between the Soul and the Body or Influx*) を直接購入して読んでおり、1837年までにはスウェーデンボルグの著作を数冊所蔵していた。また1835年1月6日には、ボストンのスウェーデンボルグ教会を実際に訪れ、儀式の簡素さに感心している。<sup>5</sup>

スウェーデンボルグから学んだ「照応」 (Correspondence) の思想が明確に示されているのは、1829年6月14日に試みた「夏」 (“Summer”) という題目の説教<sup>6</sup> である。この説教は「天文学」 (“Astronomy”) と同様、7年後に出版される『自然論』 (*Nature*, 1836) の中心的主題を既に提出しており、『自然論』に直接つながってゆく内容を備えた興味深い説教と言える。エマソンはまず自然界の美しさと、自然美のなかで生きる人間の喜びについて語り、自然界は人間に神の遍在という教訓が書き記されている書物であると説いている。また自然は美の効用を持つだけでなく、人間や動物の命を養うという役割を果たしており、自然は神の慈愛の現れであるとも述べる。そして自然の存在している究極の目的は、人間を神と一体にさせることにあるとするエマソンの思想の最も根本的な教義

---

4 *The Letters of Ralph Waldo Emerson*, eds. Ralph L. Rusk (vols. 1-6) and Eleanor M. Tilton (vols. 7-10), 10 vols. (New York: Columbia University Press, 1939-95), vol. 1, p. 173.

5 *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, eds. William H. Gilman, Ralph H. Orth et al., 16 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1960-82), vol. 5, p. 4; hereafter cited as *JMN*, with volume and page number.

6 *The Complete Sermons of Ralph Waldo Emerson*, eds. Albert J. von Frank et al., 4 vols. (Columbia: University of Missouri Press, 1989-92), vol. 1, Sermon No. 39, pp. 296-300; hereafter cited as *CS*, with volume and page number. エマソンの説教の題目については、Arthur C. McGiffert, Jr. が *Young Emerson Speaks: Unpublished Discourses on Many Subjects by Ralph Waldo Emerson* (Boston: Houghton Mifflin, 1938) の巻末に収録されている“A List of the Sermons” (pp. 263-71) において、エマソンが題目を付けていない説教全てに仮の題目を付けているので、それに従った。

が提示される。さらに「外的自然のなかには、人間のなかにある何らかの象徴や象形文字でないものは何もない」<sup>7</sup>と述べる。ここには自然は神の言葉を象徴的に人間に伝達する役割を果たしているという、エマソン独自の言語観の萌芽を既に見出すことが出来る。

1831年12月3日の日記には、「照応」の教義が、「魂と物体は調和している。それ故人間が魂を深く知れば知る程、それだけますます外界の自然に対する愛も強くなるのだ」<sup>8</sup>と記されている。また1832年5月7日の日記には、弟チャールズ（Charles Chauncy Emerson, 1808-36）が収集した貝殻を観察した時に、自然物が精神界を象徴していることを実感したという、「貝殻の入った一箱の飾り棚は、人間精神全体を表現しているのではないかと私は思う。全地球の植物や獣の歴史や、雲のあらゆる姿を描いた絵についても同様のことが言えるだろう。全てのものは象徴的な意味を持っているのだ」<sup>9</sup>という記述がある。さらに1832年5月27日に試みた説教「天文学」においては、天文学と宗教との関係を指摘し、人間は天体を観察、研究することを通じて、神に関する正しい知識を持つに至ると、次のように説いている。

目と光を創り、地球を透明な大気で包んだ神は、このようにしてその被造物である人間に、星を観察して星の法則を書き記すことを教えました。このようにして、神は天を開き、宗教を改革し、精神を教育するようにしたのです。自然の温和な、愛情深い、しかもぞくぞくさせる声により、神は人間をより高い真理へと導き、人間が能力をあげて研究すれば、神自身についてのますます正しい知識を与えることで報いるのです。<sup>10</sup>

以上からエマソンの内面には、1832年10月のボストンのユニテリアン教会の牧師職辞任以前に、「照応」の思想が形成されていたという事実を理解することが出来る。こうした「照応」の思想の形成過程は、ヨーロッパ旅行中のパリの動植物園での体験に直接的に結び付いてゆくのである。エマソンは、1833年7月13日にパリの動植物園で、自然界と人間精神との「照応」に関する啓示を得、神秘的な体験を持ったという以下の記述を日記に記して

7 Ibid., 299: "There is nothing in external nature but an emblem, a hieroglyphic of some thing in us."

8 *JMN*, 3:310: "The soul and the body of things are harmonized, therefore, the deeper one knoweth the soul, the more intense is the love of outward nature in him."

9 Ibid., 4:14: "I suppose an entire cabinet of shells would be an expression of the whole human mind; a Flora of the whole globe would be so likewise; or a history of beasts; or a painting of all the aspects of the clouds. Every thing is significant."

10 CS, 4:158, Sermon No. 157: "He who made the eye and the light and clothed the globe with its transparent atmosphere did thereby teach his creature to observe the stars and write their laws. Thereby he opened the heavens to them to reform their religion and to educate the mind. By the mild, affectionate yet thrilling voice of nature he evermore leads them to a higher truth, and rewards every exertion of their faculties by more just knowledge of Himself." 斎藤光訳『自然について』「エマソン選集」第1巻（日本教文社、1960年）、12頁を参考にした。また以下の本論中のエマソンのエッセイ、日記、講演、説教からの引用文の訳出に際しては、斎藤光・他訳『エマソン選集』全7巻（日本教文社、1960-61年）、酒本雅之訳『エマソン論文集』上・下巻（岩波文庫、1972-73年）を参考にした。

いる。

ここでは我々は、自然の尽きることのない豊かさに感銘を受ける。当惑するくらい次々と続いている生物の姿の系列を見ていると、宇宙はこれまでによりも驚くべき謎であると思われてくる——ほのかな色合いの蝶、彫刻を施したような貝殻、鳥、獣、魚、昆虫、蛇——そして有機体を模している岩石に交じって、上昇しようとする生命の萌芽が至る所に認められる。どんなに奇怪で、野蛮で、あるいは美しい形の生物でも、それを観察している人間に本来備わっている属性を表現していないものはない——まさにそこにいるさそりと人間との間に神秘的な関係がある。私は自分の内部に、百足を——大ワニ、鯉、鷲、狐を感ずる。私は不思議な共感に動かされる。私はいつも言っているのだ——「自分は博物学者になろう」と。<sup>11</sup>

以上スウェーデンボルグの「照応」のエマソンの思想形成に対する影響を指摘し、エマソン自身が人間精神と自然との間の「照応」関係を体験したという具体的例を挙げてきた。<sup>12</sup> 「照応」の教義は、『自然論』及び講演「アメリカの学者」(“The American Scholar,” 1837)に結実しており、次のように記されている。

世界は象徴として存在しています。語られる言葉の部分部分が隠喩なのです。自然全体が人間精神の隠喩だからです。精神の本性を支配する法則は、さながら鏡のなかで対面するように、物質の法則に符合しています。<sup>13</sup>

自然が魂の対極であり、どの部分をくらべてみても、きちんと魂に合致していることが分かるようになります。一方が印形いんぎょうで、もう一方は押印の跡です。自然の美しさは、人間自身の精神の美

---

11 *JMN*, 4:199-200: “Here we are impressed with the inexhaustible riches of nature. The Universe is a more amazing puzzle than ever as you glance along this bewildering series of animated forms, — the hazy butterflies, the carved shells, the birds, beasts, fishes, insects, snakes, — and the upheaving principle of life everywhere incipient in the very rock aping organized forms. Not a form so grotesque, so savage, nor so beautiful but is an expression of some property inherent in man the observer, — an occult relation between the very scorpions and man. I feel the centipede in me — cayman, carp, eagle, and fox. I am moved by strange sympathies, I say continually, “I will be a naturalist.”

12 エマソンとスウェーデンボルグ及びエマソンの照応論については、Kenneth W. Cameron, *Emerson the Essayist: An Outline of His Philosophical Development Through 1836, with Special Emphasis on the Sources and Interpretation of Nature*, 2 vols. (Hartford, Conn.: Transcendental Books, 1945), vol. 1, pp. 228-52; Yoshio Takanashi, *Emerson and Neo-Confucianism: Crossing Paths over the Pacific* (New York: Palgrave Macmillan, 2014), pp. 91-94; 拙書『エマソンの思想の形成と展開—朱子の教義との比較的考察—』(金星堂、2011年)、126-31頁; Clarence Hotson, “Emerson and the Swedenborgians,” *Studies in Philology*, vol. 27 (1930), pp. 517-45参照。

13 *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*, eds. Alfred R. Ferguson, Joseph Slater, Douglas E. Wilson et al., 10 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1971-2013), vol. 1, p. 21, *Nature*; hereafter cited as *CW*, with volume and page number: “The world is emblematic. Parts of speech are metaphors because the whole of nature is a metaphor of the human mind. The laws of moral nature answer to those of matter as face to face in a glass.”

しさです。自然の法則は、人間自身の精神の法則です。すると自然は人間にとって自分の力量を量る尺度となります。自然のなかで知らないところがあれば、それだけ人間は自分自身の精神を自分のものにしていないこととなります。そして、結局、「汝自らを知れ」という古代の教えと、「自然を研究せよ」という近代の教えとは、同一の金言となってしまいます。<sup>14</sup>

さらにエマソンは「アメリカの学者」において、「このような人生哲学のために大きな貢献をしながら、かつて一度もその著作に正当な評価を与えられたことのない天才が一人います。一つまみエマニュエル・スウェーデンボルグです。…しかし彼は自然と魂の情感との間の連関を理解して、人々に教えました。目に見え、耳に聞こえ、手で触れることの出来る世界の象徴的な、つまり霊的な性質を洞察しました」<sup>15</sup>と記し、自らの「照応」の教義はスウェーデンボルグの影響を受けていることと告白している。またエマソンは連続講演「代表的人物」の一環として、1845年12月25日に「神秘に生きる人—スウェーデンボルグ」(“Swedenborg, or the Mystic”)を試み、さらに1849年12月には『代表的人物』(*The Representative Men*)を出版し、第二章でスウェーデンボルグを取り上げている。<sup>16</sup>

### 3 鈴木大拙とスウェーデンボルグ

鈴木大拙は1897年2月に渡米し、イリノイ州シカゴ郊外ラサールのオープン・コート社でポール・ケーラス(Paul Carus, 1852-1919)のもとに1908年2月までの11年間滞在した。その間1901年と1903年にオープン・コート社を訪れ、滞在していたスウェーデンボルグ主義者で仏教研究家のA・J・エドマンズ(Albert Joseph Edmunds, 1857-1941)と知り合ったことが、スウェーデンボルグの思想に関心を持つようになった契機と言われている。鈴木は1908年2月にはロンドンで開催された国際スウェーデンボルグ協会年次大会に招かれ、スウェーデンボルグの著作の邦訳を依頼された。1909年3月に帰国後は、『天界と地獄』(1910年)、『神智と神愛』(1914年)、『新エルサレムとその教説』(1914年)、『神慮論』(1915年)を邦訳・出版している。<sup>17</sup> また1912年には再びイギリスに渡り、スウェーデンボルグ

14 *CW*, 1:55: “The American Scholar”: “He shall see that nature is the opposite of the soul, answering to it part for part. One is seal, and one is print. Its beauty is the beauty of his own mind. Its laws are laws of his own mind. Nature then becomes to him the measure of his attainments. So much of nature as he is ignorant of, so much of his mind does he not yet possess. And, in fine, the ancient precept, Know thyself,” and the modern precept, “Study nature,” become at last one maxim.”

15 *Ibid.*, p. 68.: “There is one man of genius who has done much for this philosophy of life, whose literary value has never yet been rightly estimated; — I mean Emanuel Swedenborg, ... But he saw and showed the connexion between nature and the affections of the soul. He pierced the emblematic or spiritual character of the visible, audible, tangible world.”

16 *CW*, 4:51-81.

17 スウェーデンボルグの原典はラテン語で執筆されている。『天界と地獄』はロンドンのスウェーデンボルグ協会発行の英訳版 *Heaven and Its Wonders and Hell*、『神智と神愛』は *Divine Wisdom and Love*、『新エルサレムとその教説』は *The New Jerusalem and Its Heavenly Doctrine*、『神慮論』は *Divine Providence* からの邦訳である。

協会年次大会で日本におけるスウェーデンボルグについて講演を行った。<sup>18</sup> さらに1913年には評伝『スエデンボルグ』を出版し、10年間程にわたるスウェーデンボルグに対する共感と傾倒は並々ならぬものであり、そのキリスト教神秘主義思想の多大な影響下にあったことを明らかに示している。<sup>19</sup> 鈴木は日本にスウェーデンボルグの教説を本格的に紹介した最初の日本人であろう。<sup>20</sup>

鈴木が渡米し、ケーラスのオープン・コート社で雑誌編集・東洋思想の英訳の補助の仕事をするようになったのは、鎌倉の円覚寺管長で鈴木の禅の師 釈宗演（1859-1919）が、1893年にシカゴで開催された万国宗教会議に出席し、ケーラスの知遇を得たことが契機となっている。<sup>21</sup> ケーラスはドイツ系アメリカ人で、科学と宗教との一体化を提唱する雑誌 *Open Court* の編集に携わり、また *Monist* を創刊し、*The Gospel of Buddha* (1894)<sup>22</sup> などの著者でもあった。また鈴木はオープン・コート社滞在中に *Lao-Tze's Tao-Teh King* (1898)、*Açvaghosha's Discourse on the Awakening of Faith in the Mahayana* (1900)、*Outlines of Māhāyana Buddhism* (1907) を出版している。<sup>23</sup> 鈴木の老荘思想及び大乘仏教関連文献の英訳、執筆、出版が、スウェーデンボルグに傾倒した時期と重なっていることに注目すべきであろう。以上のように、鈴木がスウェーデンボルグの思想に興味を示したのは、評伝『スエデンボルグ』に以下のように記されているように、大乘仏教の教義との類似性を強烈に意識したからであった。<sup>24</sup>

スエデンボルグが神学上の所説は大に仏教に似たり。<sup>プロブリアム</sup> 我を捨てて神性の動くままに進退すべきことを説くところ、真の救済は信と行との融和一致にあること、神性は<sup>ウイズダム</sup> 智と<sup>ラブ</sup> 愛との化現なること、而して愛は智よりも高くして深きこと、<sup>ディヴァイン・プロヴィデンス</sup> 神慮はすべての上に行き渉りて細大漏ら

18 吉永進一「大拙とスウェーデンボルグーその歴史的背景ー」『宗教哲学研究』第11号（2012年）、39-41頁に鈴木の英語講演の和訳が掲載されている。

19 スウェーデンボルグの鈴木への影響については、同上、33-50頁、吉永「学問・経験・スウェーデンボルグ」『現代思想』第48巻、第15号（青土社、2020年）、188-90頁、Shi'ichi Yohinaga, "Suzuki Daisetsu and Swedenborg: A Historical Background," *Modern Buddhism in Japan* (Nagoya: Nanzan Institute for Religion and Culture, 2014), pp. 112-43、那須理香『鈴木大拙の「日本的靈性」ーエマヌエル・スウェーデンボルグ、新井奥邃との対比からー』（春風社、2017年）、143-264頁、安藤礼二『大拙ー東洋と西洋をつなぐー』（講談社、2018年）、92-128頁、蓮沼直應『鈴木大拙ーその思想構造』（春秋社、2020年）、117-24頁などを参照。

20 『天界と地獄』は『鈴木大拙全集』第23巻、149-556頁、『スエデンボルグ』は第24巻、1-67頁、『新エルサレムとその教説』は69-153頁、『神慮論』は155-576頁、『神智と神愛』は第25巻、1-274頁に収録されている。

21 鈴木は万国宗教会議での釈宗演の演説草稿を英訳している。

22 鈴木は渡米前の1895年に既に『仏陀の福音』として邦訳、出版している。『仏陀の福音』は『鈴木大拙全集』第25巻、275-509頁。同じくケーラス著 *Amitābha: A Story of Buddhist Theology* も『阿弥陀仏』として511-87頁に収録されている。

23 *Lao-Tze's Tao-Teh King* (1898) は『老子道德経』の英訳でケーラスとの共訳、*Açvaghosha's Discourse on the Awakening of Faith in the Mahayana* (1900) は馬鳴（めみょう）『大乘起信論』の英訳、*Outlines of Māhāyana Buddhism* (1907) は、鈴木が再版を嫌い、ようやく2016年になって佐々木閑訳『大乘仏教概論』（岩波文庫）が出版された。その経緯については、同書「訳者後記」参照。

24 吉永「大拙とスウェーデンボルグ」、34-37頁によると、明治20年代の日本の仏教界においては、アメリカで仏教雑誌 *Buddhist Ray* を発行していた Philangi Dasa (1849-94) の影響を受けて、スウェーデンボルグは仏教と結びつけて考えられていた。

すことなきこと、世の中には偶然の事物と云うもの一点も是れあることなく、筆の一運びにも深く神慮の籠れるありて、此處に神智と神愛の発現を認め得ること、此の如きは何れも、宗教学者、殊に仏教徒の一方ならぬ興味を惹き起すべきところならん。<sup>25</sup>

## 4 エマソンの超越主義思想と鈴木の大乗仏教の教義の比較的考察

### 4-1 神との「合一」体験と「見性」体験

エマソンは、自らの内部に「内なる神」を発見した驚きと神との直接的な「合一」体験を、極めて率直に日記、説教で以下のように語っている。

道徳的人格から宗教的人格への回心は黎明の後の昼間のようなものである。地球が回転するにつれてますます明るく照らされ、そして最後には、目が太陽を見る、すなわち魂が神を感知する特別な瞬間が到来する。<sup>26</sup> (1830年6月2日の日記)

熟考するということは、媒介を経ずに直接神から真理を受け取ることだ。それこそ生きた信仰である。… この信仰は、自分が無（nothing）であることを感じている人間にだけおとずれてくる。神が君に語りかけるのは、使節の力を借りずに、君自身を通してなのだ。<sup>27</sup> (1831年7月29日の日記)

宗教思想の革命が我々の周囲に影響を及ぼしつつあります。それは今までに起こったあらゆる革命のなかでもっとも重大なものに私には思われます。すなわちそれは全世界から個人を引き離し、今初めてその大きさにつくづく見入っている人間固有の本性を満足させるような信仰を、個人が持つように求めています。… 人は、天地を満たす声が、神は人のなかにおり、天使が群れをなしている、と言っているのを聞き始めているのです。私は自分が神とつながっているという驚くべき啓示が、自分をふさぎ込ませてきたあらゆる疑念を解消するものであることに気づいたのです。<sup>28</sup> (1833年10月27日の説教)

25 『鈴木大拙全集』第24巻、8頁。

26 *JMN*, 3:186, June 2, 1830: "Conversion from a moral to a religious character is like day after twilight. The orb of the earth is lighted brighter and brighter as it turns until at last there is a particular moment when the eye sees the sun and so when the soul perceives God."

27 *Ibid.*, 279, July 29, 1831: "To reflect is to receive truth immediately from God without any medium. That is living faith. ... It will come only to one who feels that he is nothing. It is by yourself without ambassador that God speaks to you."

28 *CS*, 4:215, Oct. 27, 1833, Sermon No. 165: "There is a revolution of religious opinion taking effect around us, as it seems to me the greatest of all revolutions which have ever occurred, that, namely, which has separated the individual from the whole world and made him demand a faith satisfactory to his own proper nature, ... Man begins to hear a voice in reply that fills the heavens and the earth, saying, that God is within him, that there is the celestial host. I find that this amazing revelation of my immediate relation to God, is a solution to all the doubts that oppressed me."

一方鈴木は自らの「見性」体験を、西田幾多郎（1870-1945）に宛てた1902年9月23日の書簡に、以下のように記している。

之に就き思ひ起すは、予の嘗て鎌倉に在りし時、一夜期定の坐禅を了へ、禅堂を下り、月明に乗じて樹立の中を過ぎ帰源院の庵居に帰らんとして山門近く下り来るとき、忽然として自らをわする、否、全く忘れたるにはあらざりしが如し、されど月のあかきに樹影参差して地に印せるの状、宛然画の如く、自ら其画中の人となりて、樹と吾との間に何の区別もなく、樹は吾れ、吾れはれ樹、本来の面目、歴然たる思ありき、やがて庵に帰りて後も胸中稔然として少しも凝滞なく、何となく歓喜の情に充つ、当時の心状今一々言詮し難し。<sup>29</sup>

鈴木は、座禅を終えた夜、月光に照らされた木立のなかを帰る途中、「無我」の境地に達し、樹木と自己との間の区別が消え失せ、一体となった心の喜びを記している。

以上エマソンと鈴木のみ秘体験に関する記述を示した。二人に共通するのは、超越主義思想及び大乘仏教の教義を概念的に構成、展開しているだけでなく、その根底には、エマソンの場合は、神との「合一」体験、さらに自然と人間との間の神秘的な「照応」関係を洞察した体験、鈴木の場合は、禅修行を通じての「見性」体験があったという事実である。両者は異なった宗教文化圏に属しながらも、「自己」を超えた超越的な世界との神秘的体験を持ったという点において共通している。<sup>30</sup>

#### 4-2 「照応」と「相応」

エマソンと鈴木が読んだスウェーデンボルグの英訳書 *Heaven and its Wonders and Hell* においては、霊的世界と自然界との関係について、“The whole natural world corresponds to the spiritual world, and not merely the natural world in general, but also every particular of it; and as a consequence everything in the natural world that springs from the spiritual world is called a correspondent.”<sup>31</sup> と記されている。鈴木はこの箇所を、「全自然界は、之れを総体の上より見ても、分体の上より見ても、悉く霊界と相応あり、故に何事たりとも、自然界にありて、其存在の源泉を霊界に取るものは、之れを名づけてその相応者と云ふ」<sup>32</sup> と訳している。それに対してエマソンの『自然論』の

29 『鈴木大拙全集』増補新版、第36巻（岩波書店、2003年）、222頁。

30 両思想家の体験は、ウィリアム・ジェイムズ（William James, 1842-1910）が『宗教的体験の諸相』（*The Varieties of Religious Experience*, 1902）において神秘的な宗教体験の特徴を示した、「言い表わしようがないこと」（ineffability）、「認識的性質」（noetic quality）、「暫時性」（transiency）、「受動性」（passivity）の全てに該当している。ウィリアム・ジェイムズ著、榊田啓三郎訳『宗教的体験の諸相（下）』（岩波文庫、1970年）、183-85頁；William James, *The Varieties of Religious Experience* (NY: Mineola, Dover Publications, 2002), pp. 380-81.

31 Swedenborg, *Heaven and Its Wonders and Hell*, trans. John C. Ager (West Chester, Penn.: Swedenborg Foundation, 2009), ch. 12, no. 89, p. 73; hereafter cited as *Heaven and Hell*.

32 『鈴木大拙全集』第23巻、「天界と地獄」、201頁。



訳者酒本雅之は“Every appearance in nature corresponds to some state of the mind.”<sup>33</sup>を「自然のなかに見られる姿はすべて精神の何かの状態に照応している」と訳し、“correspond”に「照応」の訳語を用いている。論者は鈴木「相応」は“correspondence”の訳語としては不適切と考える。「照応」は、二つの異なるものの間に内的連関性が認められる一方で、その間には「区別」があることもまた示している。「相応」は仏教用語で、「合致」、「一致」、すなわち二つの異なるものの「一元化」を暗示し、さらに対立しているように見える二つの事象・事物の「一体不離」、「不一不二」、すなわち「相即」にも通じると考えられるからである。<sup>34</sup>「相応」はむしろ英語の“conformity”に近い。この「照応」と「相応」の微妙な相違に、スウェーデンボルグの Correspondence の教義に対するエマソンと鈴木「相即」の理解の相違が認められるのではないか。

スウェーデンボルグの影響を受けたエマソンは“correspondence”を様々な用語で説明しているが、『自然論』に「自然は精神の象徴 (symbol) である」<sup>35</sup>と記しているように、「象徴」と同義に用いている。エマソンは「歴史的」キリスト教の教義を否認したとはいえ、言葉による創造という『聖書』の創造観は保持していて、自然を神の「顕現」(revelation)、象徴的言語と考えている。「顕現」とは、内的な言葉としての精神が、外的な言葉としての物質的形態を有する自然となって顕れ出ることである。不可視の霊の領域と可視の自然の領域の間には区別、階層の相違が存在するが、言葉を通じて連関、調和、すなわち「照応」している。さらにエマソンは、「人間が墮落すると、続いて言葉も墮落する」<sup>36</sup>とあるように、人間の墮落を言葉の墮落に結びつけている。そして「詩人」の役割を、可視の自然のなかで隠されている不可視の象徴的言語を見抜き、外的な言語を内的な言語に変容させることにより、人間の想念と事物の本質との間に統一性を回復することとしている。<sup>37</sup>

鈴木はスウェーデンボルグの Correspondence の教義を「即非の論理」として自らの大乘仏教理論に応用している。鈴木は『浄土系思想論』(1942年)において、スウェーデンボルグの「霊界」、天国と「自然界」、「地獄」の関係を、仏教の「極楽」と「娑婆」に重ね合わせている。そして極楽とは浄土、天国、霊性の世界、娑婆とは人間と自然の世界あるいは穢土、地上、地獄、感覚と知性の世界としている。しかしながら同時に鈴木は、浄土と娑婆は相対立していながらも、「浄土は娑婆なくしては存在不可能と云わなくてはならない」<sup>38</sup>、「浄土は娑婆の外に超然たる存在を固守しているものではなく、娑婆そのものの中から生まれなければならぬ」<sup>39</sup>と述べ、極楽と娑婆は隔絶した世界ではなく、連関しており、「一如」であるとしている。そして鈴木は、こうした極楽と娑婆の間の「自己

33 CW, 1:18; 『エマソン論文集』上巻、58頁。

34 『岩波仏教辞典』第二版(岩波書店、1989年)参照。

35 CW, 1:17: “Nature is the symbol of spirit.”

36 Ibid., 20: “The corruption of man is followed by the corruption of language.”

37 CW, 3:8-15. さらに『エマソンの思想の形成と展開』、92-93頁参照。

38 鈴木大拙『浄土系思想論』(岩波文庫、2016年)、「我観浄土と名号」、283頁。

39 同上書、302頁。

同一にして同一ならざる」、「二にして一、一にして二」、「非連続の連続」、「不即不離」、「相互映出」の関係を、彼独自の「即非の論理」で説明している。<sup>40</sup>「即非の論理」とは「Aは非Aだから、それ故にAである」という概念・論理の否定によって絶対的肯定が成立するという、形式論理学の世界では成立し得ない論理であり、西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」と同義とされている。またこれは事象と事象とが相互に「相即相入」し密接不離とされる華嚴教学の「事事無碍法界」<sup>じじむげほっかい</sup>にも通じると論じる。さらに鈴木は「浄土」の「娑婆」の関係を「一如性」という語で、以下のように説明する。

一如性と云うのは、一が一でなく、二が二でなく、不一不二、又は不即不離ということ云い現わさんとするのである。浄土と娑婆は二つで一つでない。が、この二つは個個独立して対峙するものでなく、その間に不一不二の連貫がある。相離れてはその一も立つことが不可能である。それだからと云って、二は即一であるかと云うに、そうでない。この超分別性を一如と云うのである。<sup>41</sup>

以上の概念、論理実体を否定する説明から、「極楽」と「娑婆」の間には、エマソンに認められるような言語的、理法的要素は介在していないと結論付けることが出来るであろう。少なくとも鈴木は分別、論理、観念からの離脱を主張している。エマソンは、一方では鈴木と同様に、現象的世界のみを対象とする外的言語としての「悟性」(understanding)の限界を説きながらも、普遍的、靈的、超感覚的世界を内的言語、理法として把握する「理性」(Reason)の働きの重要性を強調しているのである。

### 4-3 「大霊」と「法身」

スウェーデンボルグは *Heaven and Its Wonders and Hell* に、“... they call heaven the greatest man and the Divine man—Divine because it is the Divine of the Lord that makes heaven.”と記し、主なる神が創造したものである天界を“the greatest man and the Divine man”と表現し、鈴木はこれを「大神人」と訳している。<sup>42</sup>一方エマソンは、神を“God”、“Lord”、“Father”とするキリスト教の人格的神概念から離脱してゆき、「大霊」(Over-soul)という超越主義的で超人格的な究極者概念を抱くようになっていった。「大霊」は個々人の魂(soul)を超越した、宇宙の普遍的、本源的、統一的な原理であろう。スウェーデンボルグの「大神人」、エマソンの「大霊」に相当するのが鈴木「如来」、<sup>ほっしん</sup>「法身」である。鈴木は『大乘仏教概論』(1907年)において、「毘盧遮那仏」<sup>びるしゃな</sup>、「無量寿仏」などとして顕現する、如来としての法身について、「現象の限界を超越しているのに、いたるところに内在して輝かしく自らを顕現し、我々がその中で生きて活動し、その存在を

40 同上書、「極楽と娑婆」、13頁。

41 同上書、33頁。

42 *Heaven and Hell*, ch. 8, no. 59, p. 47; 『鈴木大拙全集』第23巻、「天界と地獄」、185頁。

成り立たせている」<sup>43</sup>、さらに個別的特性を持たず、「事物の組織化された統合体、あるいは宇宙的統一性の原理」<sup>44</sup>と説明している。

以上からエマソンの「大霊」と鈴木「法身」は宇宙の超越的原理としての共通性を有するとはいえ、エマソンの場合には、「内なる神」(God-within)が個別の「魂」に内在しながらも、「魂」を克服、超越して、普遍的な「大霊」を志向するのに対し、鈴木「法身」には個々の事物の自立性を認めることは出来ない。鈴木は『神秘主義—キリスト教と仏教—』において、「そもそも自我ありと思うことが、すべての過失と悪徳の始まりなのだ。うまく行かぬすべての物事の根源には無知がある。… 仏教によれば、世界は業縁の入り組んだ網の目のようで、その背景にそれを思うがままに操作する像などはいらぬ。現実のありのままの真相を洞察するために何よりも先ず必要なことは、無明の雲を取り払うことである」<sup>45</sup>と記している。鈴木は、「我」は固有の本質(自性)を持たず(=無自性)、色・受・想・行・識の五蘊ごうんの構成要素から成り立っているに過ぎず、万物は「空」であり「因果」と「縁起」によって相依相関そうえしながら生起、変化するため、自我、事物を固定的に実体視し、執着する「無明」からの「覚醒」を説く大乘仏教の根本的教義に従っている。<sup>46</sup>

スウェーデンボルグは *Heaven and Its Wonders and Hell* において、“... the internal is what is called the spiritual man, and the external what is called the natural man; also that the one is distinct from the other as heaven is from the world; also that all things that take place and come forth in the external or natural man take place and come forth from the internal or spiritual man.”<sup>47</sup>と記しており、この『天界と地獄』の箇所を鈴木は、「内的とは霊の人にて、外的な人とは自然の人を謂う、両者の相違は猶ほ天界と世間との相違の如し。外人即ち自然の人が為す所、及びそのうちに在るものは、すべて内人即ち霊の人に由るものと知るべし」<sup>48</sup>と訳している。さらに鈴木は、「この超個の人が本当の個己である」<sup>49</sup>と述べる。「超個己」はスウェーデンボルグの「霊の人」、「内人」に、「個己」は「自然の人」、「外人」に相当する。さらにスウェーデンボルグの「霊の人」、鈴木「超個己」は、エマソンの「大霊」(Over-soul)に、「自然の人」、「個己」は「魂」(soul)、「自己」(self)に相当すると言えよう。エマソンは説教「宗教と社会」において、「私は外的な自己と内的な自己、すなわち二重の意識の区別があることを認め

43 鈴木大拙『大乘仏教概論』(岩波文庫、2016年)、238-39頁。

44 同上書、242頁。

45 鈴木大拙著、坂東性純・清水守拙訳『神秘主義—キリスト教と仏教—』(岩波文庫、2020年)、222頁；Daisetsu T. Suzuki, *Mysticism: Christian and Buddhist* (Westport, Conn.: Greenwood Press, 1957), pp. 136-37: “To think that there is the self is the start of all errors and evils. Ignorance is at the root of all things that go wrong. ... According to Buddhism, the world is the network of karmic interrelationships and there is no agent behind the net who holds it for his willful management. To have an insight into the truth of the actuality of things, the first requisite is to dispel the cloud of ignorance.”

46 『岩波仏教辞典』参照。

47 *Heaven and Hell*, no. 92, p. 74.

48 『鈴木大拙全集』第23巻、「天界と地獄」、202頁。

49 鈴木大拙『日本の靈性』(岩波文庫、1972年)、86頁。

ます。… 二つの自己があり、一方は、他方が行わず、是認しないものを、行い、是認します。すなわちこの誤りを犯し、激情に支配されやすい、死すべき自己の内部に、至上の平穏な不死の精神が座しているのです<sup>50</sup>と語り、外面的、皮相的、利己的な「自己」と内面的、本源的、普遍的な「自己」の二つの「自己」意識があると述べている。鈴木もまた以下のように記している。

我々の外なる自己は意識の表面で働いている浅薄なものであり、この浅薄さは二つに分かれるところから来ています。我々が「これが私の自己である」とか「これが私の内なる自己である」と考えるとき、その自己は必ず二つに、自己とそれに対するものに分割されます。われわれが自己を意識すれば、必ず考える自己と考えられる自己—主観と客観—が出てきます。<sup>51</sup>

以上のようにエマソンと鈴木は、自己の超越と内在、外的自己と内的自己、主観と客観、自己意識の二重性について類似した考えを展開している点において、顕著な共通性が認められる。

#### 4-4 「宗教的情感」と「靈性」

スウェーデンボルグは *Divine Love and Wisdom* に、“... the spiritual of man has so far passed over into his natural, that he does not know what the spiritual is, and thus does not know that there is a spiritual world, the abode of spirits and angels, other than and different from the natural world.”<sup>52</sup>と記している。この『神智と神愛』の箇所を鈴木は、「人の靈性は深くその自然性の中に埋没し去りたるを以て、彼は靈性の何たるを知らず、従ひて精霊及び天人の棲息せる靈界ありて、その世界は自然界以外のもの、自然界と相異なるものなるを知らざればなり」<sup>53</sup>と訳している。鈴木独自の造語「靈性」はスウェーデンボルグの“the spiritual”に相当する。スウェーデンボルグが“the spiritual”と“the natural”を対比させているのと同様に、鈴木は「靈性」と「娑婆」を対比させ、「娑婆」が感覚と分別の世界であるのに対して、「靈性」は「無分別の分別」の世界を意味し、靈性の世界を極楽浄土としている。感覚の働きすなわち五感（見、聞、香、味、触）を通じて入ってくる千差万別の世界を分類し、法則を見出すのが知性であるが、知性は分別の働きで、自我と事物という二元的な対立のなかで事物を知覚する。「靈性」

50 CS, 4:215, Oct. 27, 1833, Sermon No. 165: “I recognize the distinction of the outer and the inner self, of the double consciousness, ... there two selves, one which does or approves that which the other does not and approves not; or within this erring, passionate, mortal self, sits a supreme, calm, immortal mind, ...”

51 佐藤平訳『真宗入門』（春秋社、1983年）、34頁。鈴木が1958年にニューヨークの American Buddhist Academy で行った英語講演の邦訳。

52 Swedenborg, *Divine Love and Wisdom*, trans. John C. Ager (West Chester, Penn.: Swedenborg Foundation, 2009), ch. 2, no. 85, p. 43.

53 『鈴木大拙全集』第25巻、「神智と神愛」、57頁。

はこうした二元的対立を乗り越える宗教的意識であると、鈴木は『日本的靈性』(1944年)に次のように記している。

精神または心を物(物質)に対峙させる考えの中では、精神を物質に入れ、物質を精神に入れることができない。精神と物質との奥に、いま一つ何かを見なければならぬのである。二つのものが対峙する限り、矛盾・闘争・相克・相殺などということは免れない。それでは人間はどうしても生きていくわけにはいかない。なにか二つのものを包んで、二つのものがひきょうずるに二つでなくて一つであり、また一つであってそのまま二つであるということを見るものがなくてはならぬ。これが靈性である。今までの二元的世界が、相克し相殺しないで、互譲し交換し相即相入そうそくにゆうするようになるのは、人間靈性の覚醒にまつよりほかないのである。いわば精神と物質の世界の裏うらにいま一つの世界が開けて、前者と後者とが、互いに矛盾しながらしかも映発するようにならねばならぬのである。これは靈性的直覚または自覚によって可能となる。靈性を宗教意識と言つてよい。<sup>54</sup>

さらに続けて鈴木は「精神」と「靈性」との相違について、「精神は分別意識を基礎としているが、靈性は無分別智である」<sup>55</sup>と述べ、靈性は精神のなかに働きながらも精神とは異なる、自我を超越する際に働く精神よりも一層高次元の直覚力であるとしている。鈴木によれば、感覚、感情、分別などの「精神」の働きは「個己」の次元のものに過ぎず、「靈性」の覚醒は「個己」でありながら「超個己」の次元に達することで初めて可能となる。

エマソンは、鈴木「の靈性」に相当する語句“spiritual nature”をエッセイ「大靈」に、「靈的な存在が人間の内部にそっくり備わっていることが分っている。…結果に他ならぬ人間が終わりを迎え、原因に他ならぬ神が始まる魂の内部には、どんなかんぬきも壁もない。…我々は一方の側面を靈的本性(spiritual nature)の深淵に、神の様々な属性にさらしている」<sup>56</sup>と記している。また鈴木は「靈性」を「宗教意識」とも言い換えているので、「靈性」に近似している語は、エマソンの「宗教的情感」(religious sentiment)、「道徳的情感」(moral sentiment)であろう。エマソンは「神学部講演」(“The Divinity School Address,” 1838)において、以下のように述べている。

この法のなかの法とも言うべきものを認識すると、精神の内部にある種の情感が目覚めます。これは私たちが宗教的情感と呼ぶもので、私たちに至上の幸福を与えてくれます。…しかし道徳的情感が心のなかに目覚め始めると、「法」がすべての自然を支配しているという保証を与えてくれ、

54 『日本的靈性』、16-17頁。

55 同上書、17頁。

56 *CW*, 2:161: “We know that all spiritual being is in man. ... that is, as there is no screen or ceiling between our heads and the infinites heavens, so is there no bar or wall in the soul where man, the effect, ceases, and God, the cause, begins. ... We lie open on one side to the deeps of spiritual nature, to all the attributes of God.”

またそれ自体が保証ともなります。そして全世界、時間、空間、永遠が、突然いっせいに歓喜に包まれるように思えます。この情感はみずから神聖であり、また神聖にする力をそなえています。まさに人間の至福です。人間を限りない者にしてくれるのです。この情感を通して、初めて魂は自分自身を知るのです。<sup>57</sup>

エマソンもまた鈴木と同様に、「宗教的情感」、「道徳的情感」は論理、分析的能力としての「知性」(intellect) と同時的に働きながらも、「知性」とは別の能動的で直観的な能力としている。エマソンが「宗教的情感」、「道徳的情感」という語を好んで用いたのは、現実世界を超越した不可視で神聖な領域に対する敬虔、畏敬の気持を示し、人間の心に生来備わっている自然な心情と直接的に結びついていると考えたからである。<sup>58</sup>

さらに鈴木「の」霊性はエマソンの「理性」(Reason) と親和性を持っている。エマソンは『自然論』において、「理性」を「普遍的な魂」(universal soul)、「精神」(Spirit) と同一視して、次のように記している。

人は、個人としての自分のいのちの内部あるいは背後に普遍的な魂があり、そのなかに、大空さながら、「正義」、「真理」、「愛」、「自由」の本性がさし昇り、輝くことを知っている。この普遍的な魂を人は「理性」と呼ぶ。それは私のものでも、あなたのものでも、彼のものでもなく、我々の方がそれに属している。…我々は知的に考えると「理性」と呼ぶものを、自然との関係で考える場合には「精神」<sup>スピリット</sup>と呼ぶ。「精神」は「創造主」である。<sup>59</sup>

普遍的で永遠の理想、霊的世界を対象とする「理性」に対して、「悟性」は現象を概念化する知覚能力である。「理性」が普遍性を志向しており、「悟性」よりも高級な能力である点では、鈴木「の」霊性と「分別」の区別との共通性がみられる。しかしエマソンの「理性」は、人間の魂の内部に宿る知的、道徳的本性であり、真理、本源的原理、正義、愛を志向ながら、神との直接的合一を可能にする人間のみ<sup>に</sup>付与されている神的、創造的能力である。エマソンの“Spirit”を「精神」としたが、「霊」よりも「精神」の方が人間の意志を強調することが出来るからであり、分別意識を「精神」とする鈴木との相違に注意する必要がある。鈴木「の」霊性は、「浄土」、「阿弥陀仏」とも同義で、道徳的善悪を超越し、

---

57 CW, 1:79: “The perception of this law always awakens in the mind a sentiment which we call the religious sentiment, and which makes our highest happiness. ... But the dawn of the sentiment of virtue on the heart, gives and is the assurance that Law is sovereign over all natures; and the worlds, time, space, eternity, do seem to break out into joy. This sentiment is divine and deifying. It is the beatitude of man. It makes him illimitable. Through it, the soul first knows itself.”

58 『エマソンの思想の形成と展開』、139-44頁参照。

59 CW, 1:18-19: “Man is conscious of a universal soul within or behind his individual life, wherein, as in a firmament, the natures of Justice, Truth, Love, Freedom, arise and shine. This universal soul, he calls Reason: it is not mine or thine or his, but we are its; ... That which, intellectually considered, we call Reason, considered in relation to nature, we call Spirit. Spirit is the Creator.”

宗教的自覚、「覚醒」を成就する霊的な「働き」である。また仏としての本質、仏になり得る可能性を意味する「如来蔵」、<sup>ぶつしょう</sup>「仏性」にも通じ、人間のみならず全ての衆生<sup>しゅじょう</sup>にも潜在的には内在しているとされ<sup>60</sup>、エマソンの「理性」とは明らかに異なる。

## 5 おわりに

鈴木は1915年にスウェーデンボルグの『神慮論』の邦訳を刊行し、1908年の『天界と地獄』から続けていたスウェーデンボルグの著作の翻訳作業を終えた。鈴木は評伝『スウェーデンボルグ』において、スウェーデンボルグの欠点を、「文章が如何にも冗漫にして、同じような事を繰り返し説く」、「五感の世界と離れたる他界のことなるが故に、普通の人々には少々信を置き難きところ少なからず」、「所述が細目に渉り過ぎたる」<sup>61</sup>などと指摘している。その後直接的な言及は頻繁にはされなくなるが、鈴木独自の大乘仏教思想の形成過程には、熱心に受容したスウェーデンボルグの教義を大乘仏教の用語に変換、応用していった形跡が認められるのである。また鈴木は *Mysticism: Christian and Buddhist* (1957) を出版し<sup>62</sup>、大乘仏教とキリスト教神秘主義思想の類似性に関する考察の対象は、スウェーデンボルグからドイツ中世の神秘思想家エックハルト (Meister Eckhart, ca.1260-ca.1328) に移っていった。

スウェーデンボルグの著作の邦訳を終えてから鈴木は、1921年に京都の大谷大学教授に招聘され、大乘仏教の本格的な研究活動に専念するようになってゆく。まず鈴木は禅仏教の研究に専念し、論考、著書を邦語、英語で執筆、出版してゆく。英文著書として代表的なものは、日本文化の欧米社会への案内書としての *Essays in Zen Buddhism* (1927, 1933, 1934)、*Zen and Its influence on Japanese Culture* (1938) などである。さらに禅仏教と並ぶもう一方の鈴木の大乗仏教の教義の中核である浄土系仏教にも研究対象を広げてゆき、『浄土系思想論』(1942年) を出版する。

一方エマソンは1840年代になると1830年代に認められたようなスウェーデンボルグに対する共感<sup>63</sup>は薄れ始め、『代表的人物』においては、以下のようなスウェーデンボルグに対する批判もまた随所に述べられるようになる。

スウェーデンボルグが打ち立てた世界構造の中心には自発性が欠けている。それは動的ではあるが生気がなく、生命を生み出す力に欠けている。そこには個性的なものが少しもない。宇宙は巨

60 『涅槃経』においては「一切衆生悉有仏性」の句で表現される。「衆生」とは一切の生物。インドでは有情の生物だけに仏性があるとされるが、中国では草木土石の無情のものにもあるという議論がなされた。鈴木が滞米中に英訳・出版した『大乘紀信論』は、如来蔵説、唯識説に基づいており、東アジアにおいて覚性は本来衆生に本来的に具有されているという本覚思想が展開された。日本の天台本覚思想は本覚が内在という思想を一步進めて、現実の事象がそのまま絶対の真理であると肯定する思想を展開した。『岩波仏教辞典』参照。さらに「如来蔵」、「仏性」については、『如来蔵と仏性』「シリーズ大乘仏教」第8巻(春秋社、2014年)、『如来蔵思想』「講座大乘仏教」第6巻(春秋社、1982年)などを参照。

61 『鈴木大拙全集』第24巻、「スウェーデンボルグ」、9-10頁。

62 鈴木『神秘主義』、「マイスター・エックハルトと仏教」、11-65頁;「“一刹那”とさとり」、130-57頁参照。

大な一つの結晶体で、それを構成している原子も、重なり合っている地層も、すべてが一糸乱れぬ秩序を保ち、とぎれのない統一を保ってはいるが、やはり冷たく静まりかえっている。個性や意志を備えていると思われるものは一つもない。存在と存在の間をつなぐ巨大な鎖が、中心から末端まで広がっていて、あらゆる運動から自由と性格をすっかり奪っている。<sup>63</sup>

象徴を認識することによって、万物の誌的な構造や、精神と物質との本源的な結びつきを理解したこの人物が、その認識から当然生まれてくるはずの詩的な表現の道具を、何一つ持たないままに終始したということは、誠に注目すべきことである。… いずれにしても彼の著書には、旋律も情緒もユーモアもなく、生気の失せた散文の平面には、どのような浮彫も刻まれてはいないのである。彼が描き出す豊かで正確なイメージには、ほんの少しの楽しささえも感じられない。少しも美しくないからである。我々は光の欠けた風景のなかを、ただ寂しくさまようばかりだ。これら死人の園のひとすみにさえ、鳥の歌声が聞こえたことは一度もなかった。<sup>64</sup>

エマソンの批判は、スウェーデンボルグの「照応」の教義は、感性界は英知界からの「流出」とする新プラトン主義の影響を多分に受けており、統一的な秩序を保ちながらも、生命のダイナミックな動き、個性、意志、自発性、自由、詩的感情などが認められないという点に向けられている。この背景としては、『自然論』の精神と自然とが正確に「照応」し合い、自然を秩序正しく整然とした万物の階梯とみる静的な自然観から、自然はより高次の段階をめざす不断の進化 (evolution) であり、変化 (metamorphosis)、流動 (flux) であるとする、より動的な自然観に次第に推移していたことを指摘することが出来る。<sup>65</sup> 以下は1840年に完成し、『詩集』(*Poems*, 1847) に収録された詩「森のしらべ」(“Woodnotes, II”) の一節である。

---

63 酒本雅之訳『代表的人間像』「エマソン選集」第6巻(日本教文社、1961年)、95-96頁; *CW*, 4:74-75, “Swedenborg, or the Mystic”: “Swedenborg’s system of the world wants central spontaneity; it is dynamic not vital, and lacks power to generate life. There is no individual in it. The Universe is a gigantic crystal, all whose atoms and laminae life lie in uninterrupted order, and with unbroken unity, but cold and still. What seems an individual and a will, is none. There is an immense chain of intermediation extending from centre to extremes, which bereaves every agency of all freedom and character.” エマソンは1845年12月に “Swedenborg, or the Mystic” を講演している。

64 同上書、106-07頁; *Ibid.*, 80: “It is remarkable that this man who by his perception of symbols saw the poetic construction of things and the primary relation of mind to matter, remained entirely devoid of the whole apparatus of poetic expression, which that perception creates. ... Be it as it may, his books have no melody, no emotion, no humour, no relief to the dead prosaic level. In his profuse and accurate imagery is no pleasure, for there is no beauty. We wander forlorn in a lacklustre landscape. No bird ever sung in all these gardens of the dead.”

65 エマソンは、ダーウィン (Charles Darwin, 1809-82) のように種の変化を説く科学的進化論を受容してはおらず、自然界において、生物は下等なものから高等なものに分類され、全自然を同一性が貫き、段階的に連続しているという進化思想を受容していた。J. W. Beach, “Emerson and Evolution,” *University of Toronto Quarterly*, vol. 3 (1934), pp. 226-60参照。



すべての形態は変化する。  
 だが実体は永続する。  
 広大な創造は常に新しく、  
 神の即興のうちに成る。  
 神の心より一つの意志が発し、無数の行為となって現れる。  
 かつて世界は、卵が石になっていたように眠っていた。  
 そして脈も音も光もなかった。  
 そして神が「鼓動せよ！」と言うと運動が始まり、  
 そして巨大なかたまりは巨大な海となり、  
 運動はさらに進行し、  
 世界の絶え間のない計画を作った永遠の牧神は  
 一つの形態に決してとどまらず、  
 永遠に逃げて行く、  
 波や炎のように、新しい形態につぎつぎに変形してゆく …<sup>66</sup>

こうした自然観の変化は、以下に示すように、1836年の『自然論』初版には、プロティノス (Plotinus, ca.205-ca.270) から引用した、精神の自然に対する優位を示すエピグラム (左) が掲げられていたのに対し、1849年の『自然論』再版には、自然が人間精神へと進化するプロセスを示す独自の詩 (右) が掲げられたことにも明らかに示されている。

自然は知恵の像あるいは模倣であり、  
 魂の最終的なものに過ぎない。自然は、  
 行うのみで、知ることのないものである。<sup>67</sup>

無数の環を持つ霊妙な鎖が、  
 すぐ近くの環を最も遠くの環に結ぶ、  
 目はいたるところきざしを眺めとり、

66 CW, 9:112: “All forms are fugitive,  
 But the substances survive.  
 Ever fresh the broad creation,  
 A divine improvisation,  
 From the heat of God proceeds,  
 A single will, a million deeds.  
 Once slept the world an egg of stone,  
 And pulse, and sound, and light was none;  
 And God said, “Throb!” and there was motion,  
 And the vast mass became vast ocean.  
 Onward and on, the eternal Pan,  
 Who layeth the world’s incessant plan,  
 Halteth never in one shape,  
 But forever doth escape,  
 Like wave or flame, into new forms …”

67 CW, 1:1: “Nature is but an image or imitation of wisdom,  
 the last thing of the soul; nature being a thing  
 which doth only do, but not know.”

そして薔薇はあらゆる言語を語る、  
そして虫は、人間になろうと努めながら、  
形態のすべての螺旋をのぼりゆく。<sup>68</sup>

エマソンは既に述べたように、ユニテリアン教会の牧師から出発したが、教会制度に対する疑念から牧師職を辞し、講演者、文筆家、詩人として再出発した。この背景には彼の内的自己の深刻な苦悩と「内なる神」の発見、自然との合一という神秘的体験があった。そしてエマソンは次第により普遍的な思想、宗教、自然観を希求する超越主義的な思想を抱くようになってゆく。そうした正統的なキリスト教から離脱してゆく過程で、スウェーデンボルグの「照応」の教義の影響を受け、またインドの宗教、哲学にも関心を広げていった。<sup>69</sup>

鈴木がスウェーデンボルグの教義から強い影響を受けた背景には、既に述べたように、鈴木自身の「見性」体験を出発点として、何よりも自らが渡米して、ケーラスのオープン・コート社で東西の思想を統合しようとするアメリカ思想の動向に直接的に触れた長期間の滞米生活がある。また近代化が急速に進展する当時の時代状況に適応するために、日本仏教の改革と近代化が要請されていた。当時の日本の知識人、宗教人が直面していたのは、欧米のキリスト教の精神的、文化的価値観の受容と対決という問題であるが、仏教者にとって最も親和性を認めることが出来たのは、スウェーデンボルグの教義などの異端視されていたキリスト教神秘主義思想であった。<sup>70</sup>

エマソンと鈴木に共通しているのは、二人の生きた時代の要請でもあった、キリスト教、大乘仏教という伝統的宗教の制度と教義から離脱し、またニューイングランド、日本という文化的、地域的境界を越え、人類一般に普遍的に適用可能な宗教、思想に再構築する探求を試みたという点であろう。そうした日米の二人の思想家の試みにおいて、スウェーデンボルグの「照応」の教義が触媒的な役割を果たしたという事実を否定することは出来ない。

※本稿は2021年度日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究C、研究課題：グローバル・エマソン、課題番号：19K00464）による研究成果の一部である。

---

68 Ibid., 1:7: “A subtle chain of countless rings  
The next unto the farthest brings;  
The eye reads omens where it goes,  
And speaks all the languages the rose;  
And, striving to be man, the worm  
Mount through all the spires of form.”

69 エマソンの牧師職辞任と講演者への転向については、『エマソンの思想の形成と展開』、64-74頁参照。またエマソンは1840年にヴェーダ聖典、1845年には『バガヴァッド・ギーター』を読んでいる。

70 吉永「大拙とスウェーデンボルグ」、34-39頁、安藤『大拙』、102-04頁参照。